

## 韓・日政治思想学会第1回共同学術会議に参加して

和田 守 (大東文化大学)

2002年5月17日・18日に韓国政治思想学会(崔丁云会長)と日本政治思想学会との第1回共同学術会議が韓国ソウル・西江大学校茶山館国際会議室で開催された。主催は韓国政治思想学会・西江大学校社会科学研究所であり、日本側ではその趣旨に応じて参加したという形であった。全体テーマは「西欧近代思想受容様相に関する韓日比較」であった。

韓国政治思想学会は1995年に発足した比較的若い学会であるが、現在会員数も200名に達し、例会はじめ活発な研究会・学術交流を進めている。日本政治思想学会との関係では、2000年5月開催の政治思想学会懇親会において、たまたま来日中であった李鍾殷氏(前韓国政治思想学会会長・国民大学校教授)のご挨拶があり、そのなかで学術交流の要請があった。そして、本会会報第11号(2001年1月発行)に「韓国学会動向」として、同会の『政治思想研究』第2集(2000年春号)の目次が訳載され、同じく会報13号(2001年11月発行)には、「海外関連学会の動向」として、同第4集(2001年春号)の英文目次が掲載されている。

このように交流を深めながら、今回の第1回共同学術会議に至ったのであるが、先ず第1～5会議の発表者とテーマを紹介しておきたい。

第1会議 李鍾殷(国民大学校)「韓国の個人主義—— 兪吉濬における個人という概念」

伊藤彌彦(同志社大学)「日本の個人主義—— 概観的試論」

第2会議 鄭容和(延世大学校)「韓国の自由主義—— 自由と自主・韓国開化期の自由概念の理解」

和田守(大東文化大学)「日本の自由主義」

第3会議 李相益(霊山大学校)「近代韓国の民族主義—— 衛正斥邪派の民族意識の特性・

「日本政府宛ての書状」を中心に」

寺尾方孝(法政大学)「日本の民権思想」

第4会議 金錫根(延世大学校)「韓国の社会主義—— 植民地下韓国における‘社会主義’理念受容の一局面・福本イズムと「正友会宣言」」

山泉進(明治大学)「日本の社会主義—— 受容と形成期における特徴」

第5会議 李承煥(高麗大学校)「韓国の社会進化論—— 韓国における「社会進化論」の受容と機能」

飯田泰三(法政大学)「日本の社会進化論—— 大正政治思想における「政治学」構想との関連において」

以上、個人主義、自由主義、民族主義・民権論、社会主義、社会進化論という5つの切り口から西洋近代思想の受容形態に関する日韓比較研究のシンポジウムであり、最後のまとめとして総合討論が行われた。なお、コメンテーターとして滞韓中の五十嵐暁郎氏(立教大学)も参加した。

### 二

韓国側の5本の報告を全体テーマである西洋近代思想の受容という点から見ると、第1・2・4報告は近代西洋文明の導入に積極的な開化派の系譜についてであり、具体的には韓国最初の近代的新聞『漢城旬報』(1883～84)、急進的開化派の朴泳孝(1861～1939)、穏健開化派の兪吉濬(1856～1914)、開化思想の大衆化に貢献した『独立新聞』(1896～99)とその第2代主筆尹到昊(1815～1945)らを取り上げて個人主義、自由主義、社会進化論受容の意義と問題点を指摘した。これに対して第3報告は正学としての朱子学の伝統を堅持する立場から近代西洋文明の導入を排撃する衛正斥邪派の系譜についてであり、具体的には韓国併合(1910)前後の反日義

兵闘争に大きな影響を与えた崔益鉉「寄日本政府」(1906)、李哲榮「到日国政府書」(1909)、柳麟錫「与日本政府」(1910)の書状を中心にかねらの民族意識の特性を抽出しようとするものであった。また第5報告は第3次朝鮮共産党の「正友会宣言」(1926)と社会主義者・民族主義者提携による新幹会(1927-31)の民族統一戦線理論に与えた山川イズム、福本イズム、さらにはコミンテルン日本問題特別委員会の「27年テーゼ」の影響を検証したものであった。

### 三

このような報告のなかで印象的だったのは、先ず、とくに第1の李報告と第2の鄭報告で愈ら開化派による西洋個人主義や自由主義の受容にあたって、伝統的な儒教的パラダイムを基準として理解していたことを強調し、そこに積極的意義を見出そうとする姿勢であった。問題の根幹は自由や権利の観念が「天地の理」という「仁義」に基づく倫理的統制を前提にして受けとめられている点であり、人間観においても「人倫」による功利の自己抑制的傾向が強い点である。もちろん、そこに西洋近代思想のパラダイムからする個人主義や自由主義の不徹底、「人民の権利」と「邦国の権利」の連結という緊張関係の弱さ、民主的・立憲主義的制度改革志向の脆さ、国家的富強への国民的エネルギー調達といった政治的意図など周到な分析を展開しつつ、『独立新聞』で「自由」という用語よりも「自主」という用語が頻用されていたことの紹介など、「内的」な自己節制と責任を伴う自立的・主体的人間と社会形成への期待を探ろうとしていると思われた。

第2にこのような問題関心は、第5の李報告に典型的なように現代「新自由主義」への警戒・批判に通じていた。主題は社会進化論の受容に関してであり、その「競争」原理は停滞的な儒教パラダイムを転換させる原動力になったことを評価しつつ、愈において典型的なようにそれは弱肉強食・自然淘汰の無慈悲な「野獣的闘争」ではなく、進歩と自由に対する信念と楽観が結合した「善意の競争」として理解されていたことを

強調していた。いわば互助的契機の重視である。しかし、『独立新聞』で尹が展開したように「優勝劣敗」「適者生存」の力の論理の強調となり、それは大韓帝国執権勢力の無能に対する憤怒と批判を通して民衆の啓蒙と実力養成運動の鼓舞に貢献したが、次第に帝国主義の論理に洗脳され屈服することになったと手厳しい批判を加えた。この点で、社会進化論そのものについて、19世紀後半、帝国主義の最盛期に登場して自由主義の変種理論であるという理解が報告のベースになり、その基調が現代「新自由主義」への危惧の念につながっているのである。このような李報告の社会進化論理解について、日本における受容形態のバリエーションに関する飯田報告ははじめ最も活発な討論が行われた。

### 四

第3会議は李報告の「民族主義」と寺尾報告の「民権主義」という具合で、時期的にもミスマッチになってしまったが、韓国併合前後の衛正斥邪派の民族意識が基本的に「中華主義的」であり、「善隣的」であった点が強調された。そのうえで、同派の「不幸な意識」として「主権」レベルの問題と「文明」レベルの問題という二つの側面から再評価するという視点が印象的であった。前者では「祖国の死守か帝国への屈服か」という折衷不可能な絶対的二者択一の問題であったが、後者では「王道(仁義・伝統儒教文物)」と「霸道(功利主義・近代西洋文物)」が絶対的な二者択一の問題ではなかったのではないかと、「王霸兼用の権道」が成立しうる領域ではないのかという報告者の問題提起である。約言すれば功利主義と人倫主義の相互止揚という問題である。

第4会議の社会主義をめぐる問題も日本側の山泉報告では初期社会主義を取り上げたので、時期的にミスマッチの感はあるが、李報告で民族主義者と社会主義者の民族解放統一戦線の問題を真正面から論及したことに、現代韓国政治思想が直面している課題が込められているのではないかと、私は受けとった。「解放」と「統一」の民族的課題の歴史的・思想的検証の一端だと思われたのである。